研究論文

政教社系の日本論・中国論

藤　田　昌　志

政教社系的日本論・中国論

FUJITA Masashi

【摘要】

明治政府采取现实主义的外交方针，在野人士采取理想主义的外交方针。政教社系的人们从其理念上来看也属于在野人士。明治政府站在现实主义的、不拘泥抽象概念和道德意识的、没有固定观念的立场上专心致力于条约的修改。相反，政教社系的人们则是站在理想主义的立场上努力修改条约。我们通过考察政教社系人们的日本论和中国论可以看清他们理想主义的思想。

キーワード：政教社　現実主義的　理想主義的　内藤湖南

1　序

政教社は鹿鳴館時代の欧化政策に反発して結成された国粋主義を標榜する団体である。しかし、昭和初期の国粋主義とは異なり、独自の開かれた国粋主義を標榜した。明治期は日本が関税自主権の回復、治外法権の撤廃を実現することによって「文明」世界の中で確かな地位を確立することが悲願の時代であった。欧化政策は欧米列強から「文明」国として認めてもらうための方策であった。しかし、それは「日本的」な伝統を重視する立場からは容認しがたいものでもあった。国権と民権が一体となって主張され得たのは日清戦争、三国干渉までであるが、本稿では、政教社系がその時代状況の進展（官僚支配の伸展を含む）の中でどのような位置を占め、日本論・中国論をどのように展開したかを明らかにすることによって、日本・中国についての明治の状況を考察してみたいと思う。

2　政教社系について

政教社は雑誌『日本人』の結成を期して 1888 年（明治 21）に結成された同人組織である。結成当初は志賀重昂（しげたか）・三宅雪嶺・杉浦重剛といった人々がメンバーに名を連ねていた。

政教社設立の直接的契機は欧化主義的風潮に対する反発であった。イギリス人コンドル

の設計になるレンガ造り二階建ての洋館鹿鳴館（現在の千代田区内幸町一丁目にあった。）は 1884 年（明治 17）7 月以来、毎週月曜日にダンスの練習会が開かれた。やがて西洋ファッションが浸透し、大規模な舞踏会が 11 月 3 日に開催される。井上馨（かおる）が条約改正にあたって企てた鹿鳴館のパーティーはこの年から 1887 年（明治 20）の井上辞職まで行われた。それはいわゆる鹿鳴館時代を現出したが、あまりに無自覚な欧化・宴会外交には非難も集中した[(1)]。三宅雪嶺は欧化主義的風潮への反発について次のように述べている。「一面は鹿鳴館に高官が戯れ、醜声の外に漏れたのに刺激され、一面は政府が保安条例を執行し、枯れ尾花に驚く狼狽さ加減に動かされ、余りだらしなくて仕方なく何とかせねばならぬ」[(2)]として立ちあがり、「政府の外柔内硬（ママ）に反抗」[(3)] した。政治上における動機が政教社結成の第一の理由であったと言える。

政教社設立の第二の動機は森有礼文部大臣による大学への干渉的姿勢に対する反発であった。1872 年（明治 5）8 月に発布された学制は「其の身を脩め、智を開き、才芸を長ずるは学あらざれば能（あた）はず」と学の意味を個人の立身出世や家業の繁栄に求めた[(4)]。しかし、1885 年（明治 18）、森有礼が文部大臣に就任すると、翌 1885 年 3 月には帝国大学令を公布し、東京大学を帝国大学に改組し、4 月には師範学校令・中学校令・小学校令等の学校令を公布した。この時の学校令で教育と学問の分離を図り、教育の総本山を高等師範学校とし、学問の総本山を帝国大学としたが、その帝国大学とて「夫れ然り諸学校を通し学政上に於ては生徒其の人の為にするに非ずして、国家の為にすることを始終記憶せざるべからず」[(5)] との国家主義の構想のもとに組み入れられていた[(6)]。天皇崇拝の国家主義教育政策の推進は伊藤首相によって強力に進められている欧化の政策とワンセットのものとして政教社結成メンバーには捉えられた。彼らの決起は「これ大学の極小部分なりしと雖も、新たに社会に顔出し、伊藤的勢力に対抗せしもの」[(7)] との意味を持つものであった。

政教社は二つのグループ、人脈によって結成された。哲学館（東洋大学の前身。1887 年井上円了によって創設。）系関係者と東京英語学校（現日本学園の前身。1885 年創設。）系関係者の二つである。哲学館系の人脈は井上円了を中心とするもので、井上は 1885 年に東京大学文学部哲学科を卒業し、87 年 9 月に哲学館を創設した。そこへ三宅雪嶺や棚橋一郎が講師となってやって来て、更に他の者たとえば文学撰科出身の加賀秀一が加わり一グループを形成した。いずれも東京大学文学部の同窓生である。

東京英語学校系は杉浦重剛が中心であり、東京英語学校は第一高等中学校（後の第一高等学校）などの官立上級学校に進学するための予備校として 1885 年（明治 18）、杉浦重剛、宮崎道正等によって設立された。1887 年（明治 20）になると宮崎の札幌農学校教授時代の教え子であった志賀重昂等が教師となって加わり東大と札幌農学校出身の子弟が一グルー

プを形成した。

両グループからなる政教社メンバーの特色の一つとして「当時としては最新最高の官学の学問を修得した知識青年たち」[8] であることが挙げられる。東京大学出身の政教社「同志」はすべて文学部卒業である。明治 10 年から 18 年の「東京大学」時代の文学部全卒業生 47 名のうち、実に 37 名までが政治学または理財学（現在の法学部政治コースに該当する）を主専攻とし、哲学または和漢文学を専修したのはわずか 5 名にすぎないが、その 5 名のうち哲学を専修した三宅と井上、和漢文学を専修した棚橋の 3 人が政教社の設立に参画することになったのは単なる偶然ではない。彼らは「政治エリートを養成する政策科学の中にあって、むしろ内省の学に関心が向いた希少価値だった」[9] と言えよう。換言すれば、政教社メンバーには官学のエリートコースに身を置いていたにもかかわらず、そこよりはみ出た者、あるいは反発して批判者に転じ、在野に身を処するようになった経歴を共有する者が多い [10] のである。

政教社は「国粋保存」を標榜したが、志賀重昂は「国粋」とは Nationality を意味するとしている。『日本人』第 2 号の「日本人が懐抱するところの旨義を告白す」で志賀は大和民族には「一種特殊なる国粋（Nationality）」が発達しているとしている。それを「大和民族が現在未来の間に進化改良するの標準となし基本となすは、正しく是れ生物学の大原則に順適するものなり」と言う [11]。政教社には次のような特徴があった。

第一に政教社の「国粋」は昭和の狂信的国粋主義のように天皇の神聖性や万世一系性といった政治的イデオロギーとしての性格を濃厚に持つものと異なっていた。それは「日本という国土に住む民族の長い歴史を通して刻まれた生命の年輪とも言うべき包括的な――したがって単に政治的のみならず同時に地理的・経済的・文化的な――観念」[12] であった。政教社設立時の「同志」11 名のうち 4 名が東京大学文学部の非政治的な哲学・文学を専攻していることも [13] 政治的イデオロギーの希薄性と深い関係があるであろう。

第二に政教社の国粋主義は志向として「民族の独善的、閉鎖的な自己主張に陥ることなく、むしろ世界に向かって開かれた健康なナショナリズムとしての性格を具えていたという点」（松本三之介（昭和 55）p.424）にその特徴がある。西洋文明については安易な模倣を批判したが、政教社が問題にしたのは「西洋文明を取り入れるか否かではなく、実はその取り入れ方であった」[14] と言える。

雑誌『日本人』は 1888 年（明治 21）4 月 3 日、政教社によって発刊されたが、新聞『日本』は『東京電報』の後進として 1889 年（明治 22）2 月 21 日に陸羯南（くがかつなん）を社主、主筆（のち社主）として谷干城（たてき）、高橋健三、そして雑誌『日本人』の有力な後援者でもあった杉浦重剛の尽力によって創刊された [15]。

雑誌『日本人』の国粋主義と新聞『日本』の国粋主義は基本的立場では異なるところはないが、後者の方がより政治的色彩が濃厚であった。大隈重信外相が井上外相の後で条約改正交渉を進め、政府の条約改正原案が洩れた。その内容に外国人を日本の裁判所（大審院）の裁判官に任命するという、独立国にふさわしくない条項が含まれていることが判明したとき、その改正原案反対の急先鋒に立ったのが新聞『日本』であったことからもそのことはうかがいしれる[16]。

政教社系の雑誌『日本人』や新聞『日本』は政府の〝貴族的欧化主義〟や徳富蘇峰の『国民之友』、『国民新聞』の〝平民的欧化主義〟と鼎立し[17]、自由民権運動衰退後の明治 20 年代に国粋主義として一つの思潮を形成し、新しい自己主張として明治の読者層（漢文を読める、政府に批判的な没落・不平元士族、地主、村役人、書生、小学校教員、僧侶、神官などの「伝統型知識人」[18]）を獲得した。新聞『日本』などは「営業的新聞」を否定して「独立新聞」を標榜し、漢字のルビなしを貫いた。（読者に一定の漢文の教養を求めたことによる。）そのため、やがて読者層は減少していくということはあったが。

3　政教社系の主要メンバーについて

次に、政教社系の主要メンバーである志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛、陸羯南、福本日南、長澤別天、内藤湖南について述べてみたいと思う。

志賀重昂は 1863 年（文久 3）に三河国岡崎に生まれ、1878 年（明治 11）東京大学予備門入学試験合格後、1880 年（明治 13）札幌農学校に入学した。学生時代は北海道の人跡未踏の秘境体験に熱中し、後年の地理学研究の素地を養い、1884 年（明治 17）同校を卒業、農学士となっている。二年後、南洋巡航の途に上り、植民地をめぐる列強の熾烈な争奪戦をつぶさに目撃、危機感を持った。1887 年（明治 20）その見聞を警世の意をこめて『南洋時事』として出版。1888 年（明治 21）杉浦重剛の東京英語学校で地理学の教鞭を執り、政教社を三宅雪嶺等と設立し雑誌『日本人』を発刊。『日本人』の編集人、事実上の主筆となって国粋主義の論陣を張った。1891 年（明治 24）『日本人』の相次ぐ発行停止によって『亜細亜』を創刊し編集人となる。1894 年（明治 27）日清戦争開始二ヶ月後の十月『日本風景論』（政教社）を出版し明治期有数のロングセラーとなる。1895 年（明治 28）には東京専門学校（後の早稲田大学）講師となり地理学を担当する。1902 年（明治 35）第 7 回総選挙で岡崎より政友会から出馬、衆議院議員に初当選。1904 年（明治 37）第 9 回総選挙で落選後は政党活動、実際政治から離れ、啓蒙的地理学者、世界旅行者としての面を強くし、1910 年（明治 43）までの間に韓国、アルゼンチン、英、仏、独、伊、スイス、エジプト、マライ半島等へ世界旅行を行う。1911 年（明治 44）早稲田大学教授。その後も世界各地を歴訪

する。1927 年（昭和 2）左膝関節炎に糖尿病を併発し、早稲田大学教授のまま死去。享年 64 歳。政教社のもう一人の代表三宅雪嶺に比べ政治の世界と積極的に関わり、対外的に帝国主義の弱肉強食を是認するようになった。対外膨張主義を唱え、韓国、中国への侵略を積極的に肯定していったことは否定できない。

三宅雪嶺は 1860 年（万延元）、加賀国金沢の儒医の子として生まれた。1876 年（明治 9）東京開成学校予科に入学し寄宿舎に入り、1879 年（明治 12）東京大学文学部に進み哲学を専攻。フェノロサ等の講義を受けスペンサー、ヘーゲル、カーライル等の著作に親しむ。フェノロサを通してスペンサー流の社会進化論を受容した。しかし、三宅の場合は元来が没価値的な、進化の概念を「文明」の発展段階論を介在させて予定調和的な「進歩」の概念へと展開させることで基底的思想の一面が形成されていったのではないかという仮説を立てることが許されるであろう[19]という識者の言辞は重要である。なぜなら雪嶺には非連続、対立を回避し、連続、融合で物事を考え「予定調和的な「進歩」」を志向する面が非常に強いからである。そのことが志賀とは異なり政治と積極的に関わることを避けさせたようにも考えられる。

1883 年（明治 16）東京大学文学部哲学科卒業。1888 年政教社設立までは東京大学御用掛としてまた、文部省編輯局で働いた。政教社設立一年前に役所仕事に腹をたてて辞職。政教社設立後は書籍を多く出版し 1891 年（明治 24）には『真善美日本人』『偽悪醜日本人』を出版した。両書は西欧の模倣よりは日本人の特質を発達させることで世界に貢献しようという開かれた国粋主義を発現した書である。1909 年（明治 42）の大著『宇宙』に通じる、日本と世界、地球と宇宙を社会有機体的に連続で把握し、無限の連続＝「渾一（こんいつ）」、「融合」（1889（明治 22））の『哲学涓滴』で東西文明の融合を哲学の次元で成し遂げていこうとする）でこの世の事物をとらえていこうとする雪嶺の考えが見てとれる。対立、闘争よりは調和、融合を中心とした雪嶺は政治とは一定の距離を置き、文部大臣就任の要請（1937 年（昭和 12））も辞退し、文筆家として（戦争時局推進の筆をふるう面もあったが）生き、1945 年（昭和 20）11 月 26 日、敗戦の後三ヶ月にして死去した。享年 85 歳。

杉浦重剛（1855（安政 2）－1924（大正 13））は雑誌『日本人』の創刊、新聞『日本』の刊行に際して同志を糾合する上で要（かなめ）の役割を果たした人物である。政教社の中では保守的な国家主義の面を代表する存在であった。（杉浦重剛以下内藤湖南までの記述は松本「解題」（S.55）に負ううところが大きい。）もと貢進生（維新後の明治 3 年に各藩からその規模に応じて東京大学の前身の大学南校に「貢進」〈＝推挙し差し上げる〉された俊英たち〈中野目（1993）29 頁〉）で文部省御用掛（明治 14 年）、文部省参事官兼専門学務局次長（明治 21 年）等政府の教育、倫理政策に関与する面が多かったことにもそのことは表れてい

る。もっとも井上、大隈らの条約改正論には「自国の国勢国情を顧みざるもの」と批判、排撃しているから、政教社系の生みの親として面目躍如たる面は当然存在している。1876年（明治9）から1880年（明治13）まで英国留学し、化学（科学）を勉強して後、「要するに人事も亦物理学定則と相戻らず」[20]という「理学宗」を唱導する。人間を功利的存在としてとらえつつ、個人の幸福は利他を通して十全なものとなるとしている[21]。そこから杉浦は国家を実態性を持つ自足的な存在とは考えなかった。

陸羯南（くがかつなん）（1857年（安政4）－1907年（明治40））は青森弘前の出身で司法省法学校中退の後、新聞『東京電報』、『日本』を創刊し、東亜同文会幹事長、国民同盟会相談役となっている。党派に従属する御用新聞としての「機関新聞」、もうけ主義の「営利新聞」をともに否定した。「一定の識見を有して以て輿論を代表又は誘導するところの新聞」＝「独立新聞」をもって新聞本来のあり方と考えた[22]。

その思想は国民主義の名で呼ばれたが、国民主義を「国民的統一」のための手段と考え、輿論政治である立憲政治の実現を目的とし、政治上の具体的、実際的、有効な施策の必要性を力説した。国家を貧民救済等の社会問題解決のための政治を行う機関ととらえ、個人を国家のための存在とは考えなかった。しかし、「挙国一致」への熱烈な意志を持ち、日清戦争では「頑冥不霊」な清を「庸懲」するためのキャンペーンをはり、対外硬の先頭に立つ新聞『日本』は戦争中、発行部数が伸びて一日平均2万部を超え、都下新聞紙中の有数のものとなった。この時期が新聞『日本』の全盛期であった[23]。

福本日南（1857年（安政4）－1921年（大正10））は『東京電報』、新聞『日本』を通じて陸羯南に協力し、編集、論説の執筆面で陸を助けるところが多かった。一方、政教社では志賀重昂の『南洋時事』の出版もあり、南方進出熱ともいうべきものが多くの者の心をとらえていた。杉浦重剛の『樊噲（はんかい）夢物語』(1886年（明治19)）もその一つの反映であった。その書は杉浦の口述した大意を日南が一書にまとめたものと言われている。（内容は被差別民がフィリッピンに移住し、フィリッピンの民族解放闘争に参加するというもの。）日南も1889年（明治22）フィリピンの現状視察のためマニラに向かっている。日南の南方進出策への情熱は日本の対外的な「独立の維持」と「国権の保全」に不可欠の方策と考えるところからでたものである（松本（S.55）439頁）。もっとも日南は政府主導の南方進出には多くを望まず、日清戦争後の政府の軍備拡張計画に強く反対し軍部の独善に抵抗し続けた。板垣退助が日清戦争後、公然と藩閥官僚制利欲と妥協するに至ったことに対しても板垣の節操のなさを問題にした。それは日南の在野的姿勢の顕現であったと考えられる[24]。

長澤別天（1868年（慶応4・明治元）－1899年（明治32））は三宅雪嶺主筆の『江湖新聞』の記者をつとめるなどして、政教社に入り、内藤湖南とともに1980年（明治23）『日

本人』の編集に従事した。翌年、渡米し、スタンフォード大学で文学、政治経済学を学んだ。アメリカでは「自由平等の楽土」のゆえに広く労働者にも政治参加の権利が認められているので日本人移民に対して、白人労働者の危惧や不安に対抗するために入国先で参政権を獲得することの必要性を（とりわけハワイについて）絶えず強調し、当時の日本の支配的な殖民策が人口過剰の対策としてのみ構想されていて政治的視点が欠如している点を厳しく批判した[(25)]。

長澤は社会主義にも深い関心を寄せたが、それはナショナリズムへの志向を弱めるものではなかった。社会主義への関心は国家社会主義と結びついた形で、長澤だけではなく政教社同人の間に多く見られるところであった[(26)]。長澤の強大な軍事力を背景とする韓国、中国への対外膨張論は日清戦争前後を通じて変わらなかったという点も存在する。

内藤湖南（1866 年（慶応 2）－1934 年（昭和 9））は三宅雪嶺主筆の『江湖新聞』に関係し、志賀重昂の推薦で『三河新聞』に赴任した。その後、「『日本人』革新のため」、志賀に呼び返され、政教社同人として 1890 年（明治 23）12 月から長澤別天とともに『日本人』の編集にたずさわった。三宅雪嶺の『真善美日本人』『偽悪醜日本人』は湖南が長澤とともに三宅の口述を筆記したものである。1893 年（明治 26）大阪朝日新聞の客員となっていた高橋健三（1896 年（明治 29）松方正義と大隈重信の連合内閣成立時、書記官長となった）の私設秘書となり、その論説執筆を助け高橋のために「新内閣の方針」と題する文を起草した。1915 年（大正 4）日本の対華二十一カ条要求の際には、親友の政友会党首原敬、国民党主犬養毅に説いて反対決議を行わせようとした。また、犬飼の演説の草稿を書きもしたと伝えられる。1907 年（明治 40）から 1926 年（大正 15・昭和元）まで京都帝国大学講師、教授として中国文化、中国文化との関連で見た日本文化についての著作を多く執筆し、京大中国学派の一人として世に広く知られた。湖南の根底には時代の風潮とは異なり中国文化への深い崇敬の念が一貫して流れていた。それは湖南が漢籍の抜群の読解力を通して中国の深い文字文化に通暁していたからであったと考えられる。

4　政教社系の日本論・中国論

ここでは総論としての政教社系の日本論・中国論について考察してみたい。総論としての政教社系の日本論・中国論について考察するにあたって、まず考えなければならないのは当時の時代状況である。明治時代のキーワードは「不羈（ふき）独立」（束縛されず独立すること）であるが、第一回議会劈頭、官僚閥山県有朋首相は主権線・利益線演説（1890 年（明治 23）12 月 6 日）を行い、本土を軍事的に防衛するだけでは不充分であることを、端的に表明している[(27)]。

蓋(けだし)国家独立自衛の道に二途あり。第一に主権線の疆(きょう)域を謂ひ、利益線とは其の主権線の安危に、密着の関係ある区域を申したのである。凡(およそ)国として主権線、及利益線を保たぬ国は御座りませぬ。方今列国の間に介立して一国の独立を維持するには独(ひとり)主権線を守禦(しゅぎょ)するのみにては、決して十分とは申されませぬ。

利益線とは日本にとっては朝鮮半島を意味し、外交的行動から逆算すると満州南縁部、台湾、ハワイなども利益線上にあったのではないかと思われる[28]。

治外法権の撤廃、関税自主権の回復を目指すことによって明治時代は日本帝国臣民としての一体感を持っていたことであろう。しかし、それは単に消極的な「不羈(ふき)独立」を意味するのではなく、より積極的に「利益線」を守り、確立することを意味していた。政教社においても日清戦争以前は対外論として四つの論が組み立てられていた（中野目（1993）206 頁）。それは第一に、北海道移住論や千島義会の企てに代表される方向であった。第二はハワイを中継地にした南北アメリカ大陸各地への移民論である。第三は南進論で台湾からフィリピン、南洋諸島からオーストラリアへと大日本帝国の勢力を伸張していこうとするもの（志賀重昂はその代表）である。第四は朝鮮半島を通って中国東北部すなわち満州へ向かうもので一般にいう北進論である。

政教社においてまず取り上げられたのは南進論と北海道移住論であった。前者は杉浦重剛や福本日南によって代表される。後に 1892 年（明治 24）「東方問題」がクローズアップされはじめ、植民問題が移民論という形で持ちあがってくると、南進論は政教社であまり取り上げられなくなる[29]。「東方問題」とは具体的には「朝鮮半島問題」と「満州問題」であり、四つの対外論の中では北進論に当たる。同年の清国北洋艦隊の来航、ロシアのシベリア鉄道の着工が北進論が盛んになる原因であった。（大津事件はロシアに対する恐怖心から起こったものである。）日本は自らアジアの「先覚」として「後覚」のアジアを指導すべきであるとする「東洋盟主論」によって国粋主義は「アジア主義」へと転回を始める。それは「力の福音」への帰依を示すことで、二年後の日清戦争にそのまま対応できるものとなりつつあった[30]。多くの日本人が日清戦争を「文明」（日本）と「野蛮」（清）の戦いと位置づけた。中国民衆を救うものとの大義名分に酔いしれた。

政教社も東洋盟主論の立場に立って日清戦争を支持する論陣を張った。開戦後には領土拡大の欲求を露わにし、更に「北京陥落の日は和議の日なり。和議の日は必ず遼東山東の両半島及台湾を割くべきを宣言す。之より多きを望まず、之より少なきを許さず。而して多きは当局者の功に帰し、少なきは当局者の責に帰す」[31] と中国分割を要求するまでになっていく。

1889 年（明治 22）の大隈条約改正反対運動のあと、政教社は現実の政治運動と一定の距離を置くこととなった。しかし、1893 年（明治 26）の「硬六派」と呼ばれる院内団体の結成、翌 1894 年（明治 27）に「対外硬派」という名称が一般化し対外硬運動（外国人の内地雑居を尚早とし従来の条約改正交渉を批判する運動）が盛んになると、再び政教社は現実政治に近づいていく。それは来たるべき第六議会に流動的要素が多分に存在し、対外硬派の院外の運動が果たす役割が相対的に高まり一言論結社にすぎない政教社が再び、政治の表面に躍り出て一定の影響力を及ぼすことになった[32]からであった。政教社でこの運動の中心にたったのが志賀重昂で、志賀は全国同志新聞雑誌記者連合（同盟新聞）と中央政社の結成を画策した。それは対外硬運動の中心機関と政教社が一心同体であることを意味し、中央政社の綱領「自主的外交主義を執る」、「責任内閣の完成を期す」は当時の政教社の主張そのものであったと言える[33]。

このとき朝鮮半島をめぐる日清両国は一触即発の状態となっており、右の二つの綱領は主戦論の主張と何ら矛盾するものではなかった。いや、むしろ主戦論へと積極的に転化しうるものであった[34]。1891 年（明治 24）から 1894 年（明治 27）にかけての時期を識者は政教社の変貌期と位置づけている[35]。対外硬運動への対応で志賀は運動の中心に立つことで政界に更に一歩近づき、三宅雪嶺は従来の姿勢を貫くことで批判の自由を確保した[36]。

以上のことを踏まえて、三、政教社系の主要メンバーについて―――で取り上げた人々についてその日本論、中国論を概括すると以下のようになる。志賀重昂については『日本風景論』一、所論（二）美の「日本の春」で「漢土に桜無く、又鶯（うぐいす）無し。桜無きに非ざるなり、我が桜無きなり。鶯もまた然り。彼の鶯有るはその形は大にして、その色は殊なり、その声は我が鶯の美しきに若かざるなり。」と述べるように日本の「国粋」のみを認め、中国の「国粋」を認めなかった。志賀の地理学も侵略されないための地理学の活用から大国化するための有力な根拠としての地理学の活用へと変容を遂げていった（佐藤能丸（1998）p.126）。中国を含む「亜細亜太（ママ）陸を原料地」[37]とするという帝国主義と一体化した中国論、亜細亜論を展開するに致る。

三宅雪嶺については『真善美日本人』（1891 年（明治 24））で日本人は中国の文章を漢文の訓読によって中国人同様に理解できるのであるから「邦人にしていやしくもまず支那より始め、その傍近諸邦に及び、東洋政治史なり、東洋商業史、東洋工芸史なり、東洋哲学史なり東洋文学史なり、もしくは地誌、風俗誌、動植物誌、またもしくは豪傑のこと、名家のこと、大変動のこと、斬新なる筆法をもってこれを叙述しこれを描写しこれを批判して討究せば、その世界における勲業、ねがわくは真を極むるの道において遺憾やや少なきを得ん。」と述べている。雪嶺には中国を現在に蘇生させるのを日本の使命であるかのよう

に考えていたところがある。同書「凡例」で「自国のために力を尽くすは世界のために力を尽くすなり。民種の特色を発揚するは人類の化育を裨補するなり。護国と博愛となんぞ撞着することあらん。」と記すのは雪嶺の日本論の特徴を端的に表しており、「融合」「渾一」を中心とする考えは生涯、変わらなかったと考えられる。（もっとも功利主義の一派が私のためにすることは公のためになるとするような御都合主義とも取れる。）

杉浦重剛は「国を愛すると云ふハ何か外に愛するもののある様に考ふる人もあるべけれど是は大いなる誤解にして愛国も亦遂に自愛の二字を離れざれば」[38] と述べるように愛国を自己愛の拡大と考えた。また、国家を実体性を持つものとは考えなかった。日本についてもそのように考えていたであろう。中国に関しては 1902 年（明治 35）1 月、東亜同文書院院長となっているが、同年 4 月には早々と辞職している。詳細はよくわからないが、中江兆民や三宅雪嶺もそうしたことをしているので、明治人は職が意に沿わぬと早々に辞職するのを良しとしていたのかもしれない。「支那学の必要」[39] では「顧ふに我国今日の開化は西洋より輸入し来りたるに相違なしと雖も之が根底をなしたるものは支那学にあらずして何ぞや」[40] と述べ、中国学の経済上、外交上の必要性を力説している。

陸羯南は新聞『日本』の主筆として 1889 年（明治 22）5 月 31 日以降、条約改正案反対論の先頭に立ち、個人を国家のための存在とは考えなかった。もっとも日清戦争では対清強硬論となり、「アジア改革の先頭に立とうとする日本を理解しない存在として、清国政府にたいする批難をつよめ「頑冥不霊」（筆者注:「不霊」は「頭の働きが鈍い、賢くないこと。」）を「膺懲」（筆者注 :「こらしめる」こと。）しようとキャンペーン」[41] を張った。

福本日南は陸羯南の新聞『日本』を編集、論説の執筆面で助けたが、南方進出策への情熱を強く持っていた。中国について「我等の支那」[42] で「亜細亜は亜細亜の亜細亜にして、支那は支那の支那なる也」と述べ、その自立性を尊重した。中国が「今日外圧に対し反発力の闕如たるに似たる観ある」のは「全く教へざるの民を駆りて戦へばなり」とし、そこには中国蔑視は存在していない。

長澤別天は当時の日本の支配的な植民策が人口過剰の対策としてのみ構想されていて政治的視点が欠如していることを厳しく批判したが、中国大陸での日本の各種権益の扶植をはじめとする勢力拡大論は日清戦争前後を通じて変わらなかった [43]。

内藤湖南は日本を知るには中国のことを知らねばならないという考えの持ち主であった。根底には中国への尊敬の念が存在した。文化史家（そう呼ばれることを好んだと言う）として文化としての中国、日本の両方を探求した。「所謂日本の天職」で「日本の天職」は西洋の文明を日本を介して中国に伝えたり、中国の旧物を西洋に売ることではなく「我が日本の文明、日本の趣味、之を天下に風靡し、之を坤輿に光被するに在るなり、我れ東洋に

国するを以て、東洋諸国、支那最大と為すを以て、之を為すこと必ず支那を主とせざるべからざる也。」[44] と日本の使命について述べている。もっとも日本の文明といっても中国文明の影響を受けながら発展したのが日本文明であり、日本、中国の両方の文化に通暁していた内藤湖南は中国文化を日本文化にとっての豆腐のにがりのようなものである[45] と述べたし、中国の「国粋」を認めそれを尊重する思考を内包していた（中野目（1993）p.214）。湖南は本来の「国粋主義」が持っていた、西洋文明を相対化しながら「日本の文明」を創造しようという政教社の初心を継承し[46] 発展させた。その後の湖南の足跡を見ると、政教社系の最も実り多い成果が内藤湖南に顕現したと言っても過言ではないように思える。

5　結語

明治政府の外交方針はほとんど常に「現実主義的」、民間の外交方針はほとんど常に「理想主義的」だったと言える。明治初期から現実主義的な考え方と理想主義的な考え方とが、政府と民間との対立という形をとったのは、日本の特色であり、明治初期外交のある程度の成功の原因であるとともに、後世にまで複雑な問題を残すこととともなったのである[47] という識者の言辞がある。政教社系の人々はエトス的に言えば、民間の側に属するであろう。政府の現実主義的、換言すれば抽象観念や道徳意識にとらわれないで、無思想の立場から条約改正などに携わったのと異なり、理想主義的な考え方を持っていたと言えよう。それはやがて東亜同文会の中国保全論のような日清提携論、「東亜の盟主」としての地位を日本が獲得すべきだという黒竜会の主張などに収斂していくのであるが、政教社の人たち、就中（なかんずく）、内藤湖南は、中国の「国粋」を認めそれを尊重する思考を内包していた（既述）。それは湖南が中国の「文化」に通暁していたからではないか、また中国の文化を尊敬していたからではないかと思う。ともあれ、政教社系の人々が政府と対抗する理想主義的な考え方に親和性があったのは間違いないと言えるであろう。政教社系の日本論・中国論の考察からそのことが窺い知れる。

〔注〕

（1）〔総監修〕川崎庸之等（1990）pp.852-853

（2）三宅雪嶺（1924）p.41

（3）三宅雪嶺（1933）p.15

（4）鈴木淳（2010）pp.98-99

（5）〔帝国大学の基本構想〕（1886）　p.184

（6）佐藤能丸（1998）p.45

(7) 三宅雪嶺「面棚偶語（二)」1895 年 9 月 5 日　第三次『日本人』第五号所収 p.35

(8) 佐藤能丸（1998）p.26

(9) 中野目（1993）p.41

(10) 佐藤能丸（1998）p.79

(11) 中野目（1993）p.148　参照。

(12) 松本（昭和 55)「解題」(著者代表　志賀重昂　発行者　布川角左衛門（昭和 55）所収

(13) 中野目（1993）p.41

(14) 松本（昭和 55）p.424

(15) 松本（昭和 55）p.425

(16) 松本（昭和 55）p.426

(17) 鹿野正直「ナショナリストたちの肖像」　責任編集　鹿野正直（昭和 46）pp.17-18

(18) 松本（昭和 55）p.421

(19) 中野目（1993）p.81

(20)「ユニテリアン雑誌の発行に就いて」明治 23 年 12 月『杉浦重剛先生全集』第 1 巻　所収 p.132

(21) 松本（昭和 55）

(22) 陸羯南「新聞記者」新聞『日本』明治 23 年 10 月 22-26 日

(23) 鹿野政直（昭和 46)「ナショナリズムの肖像」　鹿野政直責任編集（昭和 46）　p.53

(24) 松本（昭和 55）p.440

(25) 松本（昭和 55）p.444

(26) 松本（昭和 55）p.445

(27) 佐々木（2010）pp.13-14

(28) 佐々木（2010）p.14

(29) 中野目（1993）p.207

(30) 中野目（1993）p.214

(31)「支那分割論」、第二次『日本人』第 17 号（1894 年 12 月 25 日）p.5 中野目（1993）p.225

(32) 中野目（1993）p.221

(33) 中野目（1993）p.224

(34) 中野目（1993）pp.224-225

(35) 中野目（1993）p.226

(36) 中野目（1993）p.226

(37) 志賀重昂「日本の人口処分」『日本』1921 年 2 月号所載『志賀重昂全集』第一巻　1928 年 7

月刊所収 p.113

(38)「愛国論」著者代表志賀重昂（昭和 55）p.120

(39) 1888 年（明治 21）6 月 21 日「讀賣新聞」著者代表志賀重昂（昭和 55）pp.123-124

(40) 著者代表志賀重昂（昭和 55）p.12

(41) 責任編集鹿野政直（昭和 46）p.53

(42) 著者代表志賀重昂（昭和 55）pp.255-257

(43) 長澤別天「日本対亜細亜大陸」『日本人』明治三一年一一月二〇日　著者代表志賀重昂（昭和 55）p.445

(44)「所謂日本の天職」　内藤虎次郎（昭和 46）p.135

(45)「日本文化とは何ぞや（其二)」内藤虎次郎（昭和 44）p.18

(46) 中野目（1993）p.215

(47) 入江（1966）pp.27-29

【引用文献・参考文献】

(1)〔総監修〕川崎庸之等（1990)『読める年表・日本史』自由国民社

(2) 三宅雪嶺（1924)「自分の政治関係」第一次『我観』11 月号

(3) 三宅雪嶺（1933)『明治思想小史』岩波書店

(4) 鈴木淳（2010)『日本の歴史 20 維新の構想と展開』講談社　講談社学術文庫 1920

(5)〔帝国大学の基本構想〕(1886)『明治文化資料叢書』第 8 巻

(6) 佐藤能丸（1998)『明治ナショナリズムの研究――政教社の成立とその周辺』芙蓉書房出版

(7) 三宅雪嶺「面棚偶語（二)」1895 年 9 月 5 日　第三次『日本人』第五号所収

(8) 中野目徹（1993)『政教社の研究』思文閣出版

(9) 松本三之介（昭和 55)「解題」(著者代表　志賀重昂　発行者　布川角左衛門（昭和 55)『明治文学全集　37　政教社文学集』筑摩書房 所収)

(10) 著者代表　志賀重昂　発行者　布川角左衛門（昭和 55)『明治文学全集　37　政教社文学集』筑摩書房

(11) 鹿野正直「ナショナリストたちの肖像」　(責任編集　鹿野正直（昭和 46)『日本の名著 37 陸羯南　三宅雪嶺』中央公論社　所収)

(12) 責任編集　鹿野正直（昭和 46)『日本の名著 37　陸羯南　三宅雪嶺』中央公論社

(13)「ユニテリアン雑誌の発行に就いて」明治 23 年 12 月（『杉浦重剛先生全集』第 1 巻　所収)

(14) 大日本教育会滋賀県支部編集（1945)『杉浦重剛先生全集』第 1 巻

(15) 陸羯南「新聞記者」新聞『日本』「支那分割論」(第二次『日本人』第 17 号（1894 年 12 月 25

日）所収）
(16) 第二次『日本人』第 17 号 1894 年 12 月 25 日
(17) 志賀重昂「日本の人口処分」『日本』1921 年 2 月号所載　(1928)『志賀重昂全集』第一巻　所収
(18) 志賀重昂全集刊行会（1928)『志賀重昂全集』第一巻
(19)「愛国論」著者代表志賀重昂（昭和 55)『政教社文学集』所収
(20) 1888 年（明治 21）6 月 21 日「讀賣新聞」著者代表志賀重昂（昭和 55)『政教社文学集』所収
(21) 長澤別天「日本対亜細亜大陸」『日本人』明治三一年一一月二〇日　著者代表志賀重昂（昭和 55）明治文学全集 37『政教社文学集』所収
(22)「所謂日本の天職」（内藤虎次郎（昭和 46)『内藤湖南全集』第二巻『燕山楚水』「禹域論纂」所収）
(23) 内藤虎次郎（昭和 46)『内藤湖南全集』第二巻
(24)「日本文化とは何ぞや（其二)」（内藤虎次郎（昭和 44)『内藤湖南全集』第九巻所収）
(25) 内藤虎次郎（昭和 44)『内藤湖南全集』第九巻
(26) 入江昭（1966)『日本の外交』中央公論新社　中公新書　113（2000）4 月 25 日　32 版を使用。